

序 文



第8代金沢大学長

岡田 晃

金沢大学は、昭和24（1949）年5月に新制大学として発足し、平成11（1999）年に創立50周年を迎えた。これを記念して、ここに『金沢大学50年史』（部局編・通史編の2巻）を刊行する運びとなった。

金沢大学の淵源は、遠く文久2（1862）年に設置された加賀藩の種痘所まで遡ることができる。その後、医学校などを経て金沢医科大学へと発展するが、その他の前身校である第四高等学校（明治20年）、石川師範学校（明治7年）、金沢高等工業学校（大正9年）も多彩な教育と研究を展開させてきた。それらの活動の蓄積を踏まえ、昭和24年に法文学部、教育学部、理学部、医学部、薬学部、工学部の6学部からなる総合大学として新制大学の歩みを開始したのである。

開学後の大学の主要な事柄として、昭和30年代では、ペンシルバニア大学との初の大学間交流協定締結や、昭和天皇・皇后の大学行幸啓、開学10周年記念式典挙行などが挙げられる。昭和40年代には、多くの大学と同様に本学でも大学紛争を経験し、その対応をめぐり全学的に揺れた。昭和50年代になると、大学入学者選抜共通第1次学力試験の実施導入や、法文学部の分離などがあり、昭和60年代から平成以降は、角間地区への総合移転計画事業の実施、大学院の整備充実、医学部附属病院の再開発事業など、あいついで大きな歴史的事業を積み重ね、北陸の基幹的総合大学としての発展の道を歩んできた。

これまでの金沢大学では、開学後の『金沢大学十年史』以外に本格的な大学史を編纂する機会を有してこなかった。したがって、前身校のまとまった沿革を捉えることもできず、新制大学発足に関する経緯など、多くの重要な歴史的事柄が確定されないままに置かれてきた。そこで、この誇るべき伝統ある金沢大学の歴史を、創立50周年の節目にあたって集大成することは誠に意義深いものがあると考え、その編纂事業に全学を挙げて協力してきた。

この事業を進めるために、金沢大学50年史編纂委員会が平成8年7月に組織され、

『金沢大学50年史』とともに『金沢大学 写真で見る50年』も含めて、この刊行の大業に臨んできた。その成果は、あいついで上梓されるが、特にこの『金沢大学50年史』は大学史としては初の企画であるCD-ROM版も備えるなど、いくつか意欲的な編集を敢行してきた。そうした新しい試みも含めて、私としては歴史的評価を大いに期待したいところである。

現在、日本の大学は「大学審議会答申」(平成10年10月)を受け、また「独立行政法人化」の問題など、かつてない改革の大きなうねりの中に置かれている。金沢大学においても、教養部改組に伴う教養教育機構の設置(平成8年)や、大学院自然科学研究科の区分制博士課程への改組(平成9年)など、大学教育や研究の質的向上改善につとめている。また、全学的な大学自己点検作業の成果として、『現状と課題』の創刊(平成5年)や、地域社会へ開かれた大学として、大学公式ホームページの開設(平成9年)なども行っている。本学の50年史は、まさにこのような状況を踏まえて、単なる学術研究書としての大学史ではなく、大学の歴史を大学自身が冷静に振り返り問題認識した自己点検史として編纂されたものである。“Plan-Do-See(計画・実行・確認)”という言葉がしばしば自己点検作業では用いられるが、その言葉の真意を示す大学の自治能力の高さをこれによっても証明できるものと自負している。

なお、この『金沢大学50年史』をはじめとした金沢大学創立50周年記念事業は、同後援会(会長 福光博氏)の資金援助によって可能となったことを付記したい。福光会長をはじめとする後援会の方々、本書の刊行に多大のご尽力を願った学内外の関係各位に対し、この場を借りて厚く感謝の意を表する次第である。

平成11年

ご挨拶



金沢大学長

林 勇二 郎

金沢大学は、平成11（1999）年5月新制大学としての創立50周年を迎え、岡田晃前学長のもと盛大なる記念式典を催した。それから2年余を経過し、ここに『金沢大学50年史 通史編』を上梓することとなったが、この機会に金沢大学の当面する課題を述べて、挨拶に代えさせていただきたい。

金沢大学は、石川師範学校、金沢医科大学、第四高等学校、金沢工業専門学校を初めとした多くの前身校を基盤として、明治から昭和にかけて西欧の学術文化を取り入れた高等教育にあずかり、我が国の近代化に向けて大きく寄与してきた。新制大学となってからは、日本海側の基幹大学の位置付けのもと、高等教育と世界の学術研究にその役割を果たし、各界で活躍する多くの卒業生を輩出するという実績を有する。しかしながら、国の画一的政策のもとでの50有余年に及ぶ本学の活動は、世界及び地域に対して十全なる貢献を成し遂げたとは言えず、また、その個性が必ずしも十分に発揮されたとも言い難い。

21世紀を迎えた金沢大学は、「人類の知的遺産の継承と革新を目指し、地域と世界に開かれた大学」を基本理念に据え、学部教育を重視した研究大学として、新しい一步を踏み出そうとしている。

その目標に向かって、全学をあげて取り組んでいる本学の大学改革は、次のように言えよう。まず、学部教育の充実へ向けての改革である。従来、総合大学として8つの学部を擁し、それぞれのアドミッション・ポリシーに立って学生を受け入れ、独自で合目的に組まれたカリキュラムのもとで教育を行い、有為な人材を社会に送り出してきた。しかし、18歳人口が減少し、また教育の複線化が進められるなかで、高校卒業生を主たる対象としつつも、高専や短大からの編入学や、リカレント・リフレッシュのための科目等履修生など、学生の受け入れは多様化する傾向にある。他方、卒業生は、大学院進学が一般化している理工系の修士課程の修了者を含めて、社会の需給バランスの変化と近年の景気低迷のなかにあり、本学では教育の在り方や、学生の入口と出口の問題を相互に関連づけて議論している。その具体的対応と

しては、学部教育を3つのグループ（人文社会系、理工系、医学系）に大きく再編成し、教育の効率化と多様化への対応を企図している。さらに大学院については、高等教育の中心がより高度な位置付けに移行している現状を踏まえ、医学系、自然科学、社会環境科学の3研究科の体制とし、加えて、重点化研究のためのプロジェクト研究科を学内的に措置する計画である。医学研究科が一足早く大学院部局化を果たしたのに続いて、自然科学研究科も大学院部局化を目指し、また社会環境科学研究科は区分制大学院への移行を着々と進めている。あわせて、専門大学院のひとつとして、ロースクール設置も視野に入れ、高度職業人養成を目指しているところである。

こうした金沢大学の改革と並行して、北陸3県に賦存する高等教育機能を集積し、環日本海地域の拠点として、世界に向けて知の情報を発信するための大学連携の在り方を模索している。

金沢大学にとってもうひとつの大きな課題は、全国の国立大学で進められている「国立大学法人」化への対応である。国立大学の設置形態に関しては、長らく日本の国立大学制度上の課題とされてきたが、とくに国の行政機関の一部として位置付けられてきたため、予算・人事・組織など種々の制約があり、大学における教育研究の柔軟な対応を図る上での障害となってきた。独立した法人格を有することによって、大学に科せられた「優れた人材の養成」「学術研究面での創造と継承」「社会貢献」という重大な課題達成へ、より効果的に取り組めると理解している。これは、金沢大学が掲げた理念とも合致しており、全国の国立大学とともに、この法人化に向けて自主的自律的に対処するため、その体制づくりに努力しているところである。

21世紀の金沢大学に問われているものは、開放と自立であると受け止めている。開放は世界に向けての開放であり、同時に地域社会の中での開放でもある。石川県は日本の中央に位置しながらも、首都圏や関西圏との間に一定の距離を隔てており、本学はこのような地域と一体となることで、個性的な学術研究を育んできた。グローバル化が進み、情報があふれるIT時代にあって、如何に個性的な「知」を創造し、新しい情報発信基地となるか、金沢大学にとって今はその正念場にあるといえよう。

平成13年

ごあいさつ



金沢大学創立50周年記念事業後援会

会長 福光 博

『金沢大学50年史』の発刊、心からお祝い申し上げます。金沢大学は第四高等学校、石川師範学校、石川青年師範学校、金沢高等師範学校、金沢医科大学（附属医学専門部、附属薬学専門部、附属結核研究所）及び金沢工業専門学校を包括して昭和24年5月、新制総合大学として発足以来50年の歳月が流れ、平成11年5月には創立50周年を迎えた。この50年目の節目にあたり、金沢大学が創立50周年記念事業の一つとして、『金沢大学50年史』（部局編、通史編の上下2巻）の刊行を計画し、本後援会が支援する形をとったことは至極当然のことである。ご承知のように金沢大学はこの50年の間に城内キャンパスから角間キャンパスへの第Ⅰ期総合移転事業を完了させ、更に第Ⅱ期移転事業や宝町地区再開発事業など大型プロジェクトが進行中であり、まさに日本海側の基幹総合大学として機能しようとしている。この機会にこれまでの歴史を検証し、未来に飛躍するための足場として50年史は不可欠であろう。

本書の刊行には岡田晃学長の強いリーダーシップと橋本哲哉50年史編纂委員会委員長を中心とする同委員会委員のなみなみならぬ熱意があったと聞いている。本書の紙面が単なる記録としてではなく、歴史書としての重みが加わっているのはこのことによるものであろう。また、第四高等学校などの大学前史についても整理、言及していただいております。私共、四高出身者にとって嬉しい限りである。編集者の諸氏に深く感謝申し上げます。

平成11年



角間キャンパス - 大学会館



角間キャンパス寸描



角間キャンパス - メインアプローチ



旧城内キャンパス - 石川門と金沢大学の標石



角間キャンパス - アカサカインターフェイス



コロネード



旧城内キャンパス - 教養部、理学部校舎



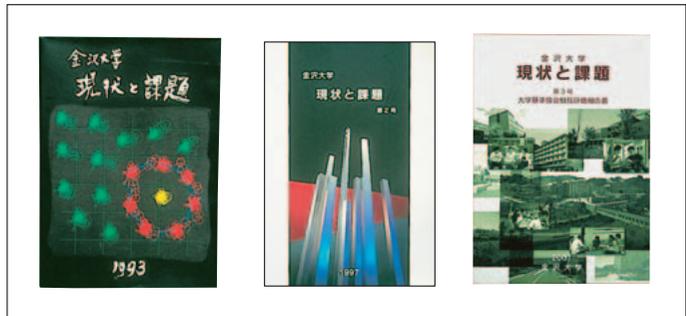
角間移転の記念石碑



金沢大学運営諮問会議



金沢大学の課題と取り組み



金沢大学現状と課題 1～3

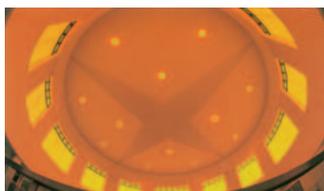


金沢大学サテライトプラザ

角間キャンパス校舎等配置図



法学部・経済学部、文学部、図書館、学生会館
(完成直後の角間キャンパス)



図書館の吹抜け天井
四高の校章北斗星をイメージ



角間キャンパスから金沢市街と遠く日本海を望む



総合移転 期事業施設計画（模型）



総合移転 期事業工事風景



創立50周年記念式典



岡田学長挨拶



東京大学蓮實学長



国際シンポジウム基調講演
W.S.ファイフ教授



評論家立花隆氏の特別講演

交流大学のロシア・カザン大学副学長



交流大学の中国・蘇州大学校務主任



金沢大学50年史



創立50周年記念祝賀会



新病棟全景



歴史を物語るレリーフ（北病棟の囲障）



ホスピタルプロムナード



宝町キャンパス全景



平和町キャンパス全景



通学風景



人との広がり期待着 - 中学校の中庭



新しい幼稚園



新校舎の夕景



金沢大学との協定校 アメリカニューヨーク州立大学バッファロー校

金沢大学
名誉博士



ハーバード大学廣瀬龍雄教授



ロンドン大学D.A.ブラウン教授



アンコールワット保存・修復の国際研究プログラムに参加



第42次南極観測隊越冬隊員として南極に派遣



ベトナム・タンマウ障害児学校と附属養護学校が姉妹校の協定



海外留学フェア2002（日本人学生を対象）で母校を紹介する留学生



授業風景



金沢大学サテライト・プラザ開館記念茶会でお点前を披露する留学生



百万石祭でお神輿をかつぐ留学生